

芥川だより

発行日 * 2023年6月1日 e-mail: ab_87968624@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸

発行人 下村嘉明

〒661-0951

尼崎市田能5-3-10-601

☎090-8796-8624

***** 一部200円です *****



悩ましいコンプレックス

意識していようが無意識であろうが、次から次へとコンプレックスが湧いてくる時がある。自分がこれまでしてきたことが、何もかも否定され潰されそうになる。最初は些細な事柄から広がっていく。例えば目が疲れる、文字を続けて読み切れない。文字がかすみだし活字から目を離す。日に三度しか使ったらいけないという目薬を一滴差しベッドに横たわる。横たわると、なんでこんなに目が弱くなったんだ、もともと視力は良くて目が疲れるなんてことはなかった、とうそぶく。

それが、高校生になり落ちこぼれそうになり詰め込み勉強をやるようになり乱視と近視になったが詰め込み勉強をやめず、眼鏡をかけている方が賢そうに見えるんじゃないかと、へんなうぬぼれもした。目を悪くしてまで頑張った勉強の成果はどうだったのか。大学紛争のおかげで勉強もせずに卒業だけはできたが、中身のない薄っぺらい卒業証書だった。

読書には、悪魔が棲んでいて手招きをする。もっともっここっちへおいでよと誘惑する。バカな私は在りもしない宝探しのように手当たり次第に読む。読むことを、なりよりも大事な事だと錯覚して読む。そのなれの果てが目を弱めることになった。

白内障の手術もし、良くは見えるのだが目が疲れるのは解消されない。今後もよくなることはないだろう。人生は取り返しがつかない。目と同じようにいたるところが悲鳴をあげているように思える。私は孤独な空間に自分だけ取り残されたように感じ始めると、忘れていたようなことまでもが息を吹き返して私を責め立ててくる。いろいろなコンプレックスを考えだすと、もうわたし独りでは立ち向かえなくなるから、酒に逃げてきたのが私の人生だった。酒こそが私の救いの神だったと言える。

死をめぐるあれやこれ(103) 石川 吾郎

究極のロビー活動

ロビー活動とは特定の主張をもつ団体や個人が政府の政策に影響を及ぼすために行う私的な政治活動ということだ。米国で国会議員に自らに有利な法律を制定させようと活動する巨大企業のプロモーションが有名だ。規制はあるものの、その裏では巨額の金が動くことになるらしい。ところが日本では、米国よりもっと効率的な制度が確立しているという。それが首相の組織する有識者会議や諮問会議といったもの。◆総理大臣がこのような会議に対して、ある懸案について諮問をすると、この会議からの答申書が作成される。NHKのニュースはすかさず会議の責任者が首相に答申書をうやうやしく手渡す姿を報道する。中身についてはあまり深掘りしない。ただいかにも権威ありそうな雰囲気画面で伝える。

◆こういった会議には「民間議員」と呼ばれる不思議な者たちが出入りする。かれらは「議員」と呼ばれるが決して選挙で選ばれたわけではなく、ただ大企業の経営者や「学識者」とされる大企業の利益の代弁者たちを政権が指名しただけ。これがまさにロビイスト。竹中某はその代表格だった。こういった者たちが国策に提言をする。それはほとんど常に国民の大部分に不利で、大企業に利益になることなのだ。しばしば他国の巨大企業に有利な制度さえも導入されてきた。◆このような提言をもとに、内閣は一年間の「骨太の方針」なるものを作り六月に発表

する。これが世界で一番効率的なロビー活動というわけだ。諮問会議や有識者会議には、大企業や海外巨大企業の利益の拡大させる意欲満々の「学者」や企業の代表が「民間議員」として指名されているのだから。こんな仕組みを何とか壊すことをしないと・・・。

特にNHKニュースがこういった仕組みの権威付けの道具になっているのは、実に罪深いことだ。

芥川だより一九七号 目次 ページ

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム103	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 111	坂本一光	2
哲学命いの時事放談61	祖蔵哲	3
大峰奥駆道67	下村嘉明	5
近未来ショートショート	I・A・	6
オクラの山たより81	因了生	6
隠された歴史56	満田正賢	9
支離滅裂 近未来予想	y・s・	12
Short & short		
道を行く 四〇	成瀬和之	12
俳句	影山武司	14
編集後記	S K生	14
ふみの道草60	山椒魚	15

素老人☆よもだ帳 (111)

坂本 一光

◆いわゆる暗合句について

川柳や俳句は五七五の十七音字を基本形にしている。自由雑詠もあるが、とくに川柳では課題を与えられて句を詠む課題吟の機会が多い。大会などでは六題七題のすべてが与えられ句を「競う」こともしょっちゅうである。その際、いわゆる暗合句が問題になることもそんなに珍しいことではない。極端な場合は盗作ではないかと騒ぎになることもあるが、所詮は十七音字の狭い世界に思いを込めようとするのだから、人の考えることは同じ傾向を持つのを避けることはできない。そんな傾向に流されず、我が思いを我が言葉で我がうたにするのが「私らしい句」というものであるが、それがなかなか難しいことなのである。

さて、最近のことであるが、そんな暗合句問題が素老人が関わる句会でもあった。見過ごせないと思ひ、またいい機会なので以下のようなことを会誌に書いた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

○入選句の取り消しについて

先に開催した川柳大会における入選句の内、三句の入選を取り消しましたのでお

知らせします。取り消した理由は以下のとおりです。

取り消した句の一句は、投句者がすでに他誌に投句し入選した句を、今大会に重複して投句した句であったためです。

他の二句はいずれも、今大会の投句者とは別の方がすでに他の川柳誌等に発表している句と同一句であると判断したためです。このことについて投句者に知らせ、投句者もそれを確認しています。

以上のことから、三句の入選を取り消しましたので、大会に参加した選者及び会員の皆さんにご報告します。

また、大会がすでに終了していることから、取り消した三句分の補充はできなかったことを申し添えます。

今回の入選取り消しに関連して、投句にあたりあらためて留意すべき事項を以下にまとめましたので、参考にして下さい。

■投句にあたり留意すべき事項

私たちは、五七五の十七音字に自分の思いを込めて川柳を詠みます。自分の近況を詠む「近詠」、テーマを与えられて詠むのではなく、あることについて自分の考えや思いを自由に詠む「自由吟」(自由詠)、与えられたテーマや課題(宿題)を受け自分らしく深めて詠む「課題吟」(題詠)などがあります。

いずれの場合も自分らしく思いを深めて川柳に詠み、詠み合った川柳を通して柳

友たちと交流することは、私たちにとって何よりの楽しみです。私たちが、それぞれ所属する川柳会の一員として川柳を詠む所以はそこにあります。

以上のことを大前提に、川柳の投句に関連する留意事項を幾つか記します。

(1) 暗合句について

「暗合」(暗号)ではありません)とは、辞書によれば「偶然に一致すること」です。暗合句とは「偶然に一致した同一句」のことです。

川柳は十七音字と文字数が少なく、「一読明快」を心がければ心がけるほど、とくに課題吟では同想・同類句が多くなる傾向があります。極端な場合、十七音字が完全に一致する暗合句も実際にあります。十七音字が完全に一致しなくても、幾つかのキーワードや句意の同一性によって暗合句とみなされることもあります。

そのときの考え方は単純明快です。同一とみなされる句が過去にあったことが判明した時は、その句が作られた事情に一切関係なく、潔く、「後で投句された句は取り消す」「取り消される」ということです。作者として気がつけば自ら取り下げを申し出ます。大会等の運営者が気づいたときはその旨を本人に知らせ、入選を取り消します。

なお、盗作や剽窃(ひようせつ・他人の文章・語句・説などを盗んで使うこと)が許されないことは言うまでもありません。

(2) 「相討ち」について

暗合句は、投句に時間的なずれがあるのが一般的です。しかし、まれには、大会等の同じ時に十七音が一致する句が投句されることもあります。昨年、他誌の選で、私もそれを経験しました。とてもいい句だと思いましたが、こういう場合は「相討ち」と言つて、どちらの句も没にします。

(3) 二重投句について

自分の句であっても、「既発表句も可」と明記されない限り一般的には、一度どこかで選者に選ばれ入選し発表された句を、他の選の場に投句することは二重投句となり許されません。二重投句に気付いたときは、自ら申し出て取り下げます。

そうならないためには、川柳大会など選のある場に投句中の句は、その結果が分かるまで他の選の場に投句しないようにしてください。

気持ちよく、思いつ切り、私の思いを私の言葉で五七五に託しましょう。

.....

「暗合句」、私の経験 (1)

二〇一一年の東日本大震災で福島第一原子力発電所が事故を起こしました。その余熱冷めやらぬ二〇一五年、私は上五に「パンドラの箱」と置いた六句を作った。選者は面白いと思つたようで、会誌の巻頭を飾った。

パンドラの箱開けたのは誰ですか

パンドラの箱飛び出した放射線

パンドラの箱漏れ出した汚染水
パンドラの箱閉める術ない科学
パンドラの箱開けたがる人ばかり
パンドラの箱は宝の箱じゃない

一句目、単純に言えば二十世紀の科学の誇るべき成果である核エネルギーの解放を、私はパンドラの箱を開けたのは誰だと詠んだ。しかし、そんなことに関係なくとも「パンドラの箱」と来れば「開けたのは誰だ」と来るのはごく自然な発想であろう。「先行して同じ句が二〇一四年にありましたよ」と、ある機会に人から教えられ知つたのは、昨年だった。大阪のある川柳会の会誌で、私はその存在すら知らなかった会であった。

「相討ち」、私の経験 (2)

昨秋、「練る」という課題で選をしたことがあった。選を依頼されたとき、練るなどと言われても私の思いはせいぜい、土を練るとか、構想を練るとか思いつく程度でとても句など出来るはずもないと思つたものである。精一杯考えて準備した「選者吟」は、次の句であった。

練りあげた心のかたち五七五

それはさておき、二百名を超える人が二句投句した句箋紙を見ると、川柳人の発想の広がりや深さに感嘆した。例えばこんな句

構想を練る間も時は過ぎて行き

練るたびに餡も頭も堅くなる

納得のゆくまで練っている愚作
練り直す度に自分を見失う
私がだんだん消える練り直し
万策が尽きると欠伸ばばかり出る
なめらかなるまで人間をこねる
透明になるまでボクを練り上げる
丹念に練り上げてゆく明日の土
このときの選の中で、私は初めて「暗合句」に出合った。

にげんの心が練つた再生紙
人間のこころが練つた再生紙

の二句である。漢字とかなの違いはあるが、十七音が同じで同一句である。この句は、木材などから植物繊維(パルプ)を溶かし紙を漉く過程は、鉱石を精錬して金属を得る過程に似ており、「練る」という課題を逸脱していないと思つた。それにしても、「練る」から再生紙に思いが至る発想の広がりや深さに、これまた感嘆したものである。佳句であると思つたが、これは「相討ち」、選外となる他なかつた。

結局、私は選者吟を次のような破調句に変えた。

かたちは心であり心はかたちになる

(かたちは心であり、心はかたちになる
大分の素老人)

「哲学命い」の時事放談 (61)

祖蔵 哲

「藁人形の哲字」

先月5月19日から21日まで広島G7サミットが開催された。G7サミットは米英仏独伊加日の7か国とオブザーバー国がメンバー国、そして招待国として印豪などいわゆるグローバルサウスといわれる第三国8か国が参加した。被爆地・広島という特別な箇所で実施されるところが大いに注目されたがそれは成果を強調する側と批判する側に大きく分かれた。G7首脳が取りまとめた成果文書「核軍縮に関する広島ビジョン」によると、従来の「核不拡散」ではなく、「核軍縮」を強調する。しかし、そもそも7か国のうち米英仏の3か国は核兵器保有国であり、さらに独伊はNATO核シェアリング国であり準保有国でもある。広島には「核廃絶」という言葉しか似あわない。そもそも、米英仏に加え露中の5か国は70年に発効したのが核不拡散条約(NPT)として国際的に核兵器の保有を認められている。またこの5か国は国連の安全保障理事会の常任理事国でもある。しかしこの後NPTに加盟していない国々、インド、パキスタン、北朝鮮などが相次いで核兵器保持を公表し、またイスラエル、イラン、シリア、ミャンマーも保有が確実視

されている。このような状況で「核軍縮」を唱えても非常にむなししい。さらに今回のサミットの目玉となったのが現在も戦争状態にあるウクライナのゼレンスキー大統領の突如の現地参加である。ロシアによる核兵器使用の脅しを受けているウクライナとしては格好の舞台である。

このように、今回のG7も国際的な議論の場ではなく、アメリカを中心とする西側諸国の覇権確認の場ではない。一方のロシアや中国はグローバルサウスと呼ばれる第三国の取り込みに熱心である。会議自体が対立を煽る場になっており解決の糸口は全く見つかっていない。ただ味方どうしの意思確認の場ではなく、そういう意味では「広島サミット」は成功であり、失敗でもあっただろう。このような舞台として「広島」が使われたことにたいして「当事者」の怒りが自然と湧いてきたのは当然であった。

さて、このサミットに合わせて国会ではいわゆる「LGBT法案」を成立させようとしていたが様々な議論の末、見送りになった。「LGBT法」は性的マイノリティを保護するもので前回のサミットからのテーマの一つでもあった。この分野で日本は相当な遅れをとっているために今回の議長国としての立場から成立が急がれていた。従来から日本は文化的には保守主義的であり、特に男女の問題に関しては儒教の影響が大きく残っており男性中心文化、権威主義的文化を保持しつづけ

ている。女性の社会進出は先進国の中でも最低クラスであり、現在はそれが経済発展の停滞をもたらしているという実利的観点から改革が求められている。

この議論の中で注目されるのが反対意見の中心概念である「性自認」という言葉である。

その法案の三章には「性的指向又は性自認を理由とする差別の解消等のための措置」とある。保守的議員の間では「自らの認識で性を決定できると解釈されれば、社会の混乱を招く懸念がある」、男性が「今日から女性になる」と言つて女性用トイレに入るなど悪用の懸念があるという。これはもともとの概念である英語の「Gender Identity(性同一性)」を既得権者に都合よく「自分で勝手に決められる」と解釈しているのである。そしてそのような想定に対して、当の女性側からも女性の立場が侵されるとして反対デモも起きている。

しかし、このような議論には大いに問題がある。それはこれが「議論」であり、また「反論」になっているかどうかである。今月は「議論とは何か」を哲学しよう。

(1) 議論とは

民主主義の根幹は「議論」であるのと言うまでもない。だから、先のような法案は大いに議論されるべきである。しかし、先の例のような「議論」が正当な

ものかどうか。

「議論」とは「前提」に基づき「結論」を「推定」するものだ。例えば「天気予報では今日は雨といっているので傘をもって出かけるべきだ」というようなものだ。「傘を持って行くべき」の「理由」「根拠」が「天気予報による」という「前提」になっている。ここで問題になるのが「結論」を確かなものにするための「前提」である「理由」「根拠」が確かなものかどうか、「天気予報では雨」という事実が真であるかどうかである。

最小限の議論のタイプは先の「前提—推論—結論」であるが、三段論法「AならばB、BならばC、よつてA⇒Bである」のように論理構造を増やして議論する方法もあるが、ここでは最小限の単位で考える。

(2) 批判的思考クリティカル・シンキング

「議論」の内容が正しいかどうかではなく、「議論」が正しく手続きで行われているかどうかを吟味することを「批判的思考」という。一般的に「批判的」というと「賛成しない」とか「悪い」という主観的な態度や価値のことを考えがちであるがそうではなくより客観的な思考である。重要なことは「理由と結論を見分ける」「表現の明確性」「情報の信頼性」などを確認することである。どのような議論が誤謬、虚偽、詭弁なのかを見抜く

ことが「批判的思考」の役割となる。そのためにはあらかじめ典型的なタイプを知ることが有用である。

(3) 誤謬論法のタイプ

議論の誤謬にはさまざまなタイプがある。主なものは理由で取り上げる「事実」に関するものである。根本的に「事実でないもの」を「事実」とする「フェイク」は論外であるが、「事実」そのものの取り上げ方に恣意性がみられるものが多い。例えば「白黒思考」。現在のウクライナ問題に関しては「西側かロシア側か」という「善か悪か」という両極端にしか考えないタイプ。さらに「ある中国人が特許を盗んだ」「中国は悪い国だ」という一部を全体に拡大解釈する「合成の誤謬」。逆に「中国は悪い国」「あの中国人は怪しい」という「分割の誤謬」など様々にある。これらは「ステレオタイプ」や「早まった一般化」などを生む。また、論理的なものでなく主観的な誤謬操作もある。それが「権威論証」である。「ある著名な学者が言っていた」とか「伝統的にこういわれている」とか「圧倒的多数が賛成している」とかいう類のものである。また、その意見集約の調査方法についての詭弁もある。

(4) 藁人形論法

先ほど話した例の「LGBT法案」の議論についていえば、「自分の一存で男から女

結果を意図的に除外することである。これも多用されている。

(5) 議論の中立性

「論点ずらし」や「部分強調」といった悪意をもった誤謬論は自己中心的であり民主主義の根本である「議論」に対して不信感を持たせて社会の発展を阻害する。しかし、この論法も善意に使うと議論が活性化する。「論点ずらし」に対しては隠されていた論点を暴いたり、「部分強調」に対しては少数意見を尊重したりすることである。議論の方法や「論法」自体が悪いのではなく、それを悪用する人間が悪いのである。

再び今回の「GBI法案見送り」に関していえば、「女子トイレ侵入」などは現在でも起きている特殊な犯罪であり、「GBI」とは関係のない別の問題である。さらに、女性の抗議デモに関していえば、なるほど「本物の女性」が不安になるであろう。しかし、「本物の女性」とはなにか。今ままで当然のようにしか考えてこなかった「本物の女性」にとつては不安になるだろう。しかし、それは「当然」であるのか。かつて「本物の男性」がたどってきた道でもある。

大峯奥駈道(67)

下村 嘉明

体験型人間学 17

日雇い労働者と正社員は全く違う。その中でも、建設作業員の日雇い作業員は厳しい。経験した人でないと分からないかもしれないが、人間であつて人間でない。そんな立場が日雇いだ。

土木作業員の中でこまめによく働く老人がいれば、日雇い作業員の可能性がある。少し注意して見ていると、夕方仕事が終わる帰り際に親方が日雇い作業員に1万円を渡すことがある。朝に払う親方もいるが、大方は帰り際だ。

私は、最初は気が付かなかったが、作業員の中で埃まみれになって良く働く老人を見て、他の作業員とは何か違うと感じた。年齢的にも違うが、作業のこまめさが違う。よくそこまで働くなあ、という印象を受けた。どのような理由があるのか分からないが、日払いが都合がいいのだろう。

日雇いとは、明日の当てがない、不安定な働き方だ。生活が安定しない。親方

がもういらなと言えば、それで終わりだ。日雇い作業を中学生からしていたという山さんは、西成の手配師の婆さんに、毎回500円を手渡し、わりの良い現場に手配してもらったという。中学生でも1万円、老人でも1万円。手取り早く稼げる仕事だ。

日雇いは、最底辺の労働者だ。その日暮らして、明日は分からない。しかし、難しい書類も手続きも要らない。国籍や犯罪歴、住所、緊急連絡先など書けない人が多くいる。日本の移民政策は遅れている。鶴橋で飲んでいると、韓国から来たママさんが多い。かなり大きな事業をしている高齢者は、多くが密入国だと聞いたことがある。漁船や貨物船の船底に隠れて日本にたどり着いたという。

大きな声では言えないような事情があるのだ。今、最も活躍している外国人はベトナム人かもしれない。過酷な労働に若者が耐えている。もう少し、日本政府も彼らの労働条件を改善しないと、将来の日本とベトナムの関係で悪い影響を与えるだろう。

彼らの働きぶりを見ていると、アフリカからアメリカに連れていかれた奴隷のような感じを持つのは私だけだろうか。日本の産業の大半は外国人や日雇いなど企業にとって都合の良い労働市場を維持し続けている。平等で自由な労働環境はない。戦争の火種である格差と貧困はまだ解決されていないどころか、過酷

になれ、女子トイレや女風呂に入れる」という結論である。これは、この法律が現行の男女別の風紀を乱すという論証であるが、非常に一部の極論である。この誤謬テクニクを「藁人形論法」=ストロームン論法」と言う。「藁人形」とは人間の形に似せた「ニセもの」であるため、一部を誇張し、さも全体であるかのように語ることを例えるものである。似たようにある物に例える誤謬論ではほかに『「ご飯論法」というものもある。「朝ご飯は食べたか」という質問を受けた際、「ご飯」を故意に狭い意味にとらえ、パンを食べたにもかかわらず「ご飯(白米)は食べていない」と答えるように、質問側の意図をあえて曲解し、論点をずらし回答をはぐらかす手法だ。前安倍政権が多用していた手法で国会でも問題になった。例えば安倍さんはよく「政治においては、最も重要なことは結果を出すことである。私は、政権発足以来、そう申し上げ、この7年8か月、結果を出すために全身全霊を傾けてまいりました。」と云って、そのプロセスに問題があると指摘されている答弁に対して「論点ずらし」をしていた。

物に例える誤謬論をもう一つ、『チェリーピッキング』サクランボの熟した果実を熟していないものから選別すること。転じて「都合の良い所だけを取る」「つまみ食い」の意味で使用される。自分の主張に合う事実だけを選択し、そうでない

にさえなっているように見える。

近未来ショートショート

I・A・

ある医師の憂鬱

二〇二八年四月一日朝、K医師はいつものように病院の午前の外来診療に出た。彼は肝臓疾患を専門とする内科医だ。だが外来では肝臓疾患ばかりを診療しているわけではない。日本の医療はそれを許すほど高度化しているわけではない。

しかし今日の最初の患者は肝臓疾患をもつ五十歳代の男性患者だ。彼は慢性の肝臓障害をもっていてそれがかなり進行している。その原因を解明するために前回の診察で検査を行って、その結果を今日、本人に伝えることになっている。その結果といえば、ウイルスが原因の肝臓障害だとわかった。とくに酒の飲みすぎといった彼の行動が原因というわけではなかった。いわば本人のせいというより、ちよつと運が悪かったというだけのことだ。ここで原因が分かったのはよかっただろう。何せこのタイプのウイルス性の肝臓障害には根本治療ができる飲み薬が数年前から存在していた。

「原因が分かりましたよ。〇〇さん。あなたの肝臓はウイルスが原因でした。ウイルスは放置するとどんどん進行して、最終的には肝硬変やガンになってしまいますが、大丈夫です。今は根治ができる飲み薬が開発されていますので、それを

使えばよくなりますよ」とK医師は、思わずニコニコして語っている自分に気づく。「ただ一瓶二百万円と、ちよつと値が張りますが、それは政府の援助制度がありますので、自己負担は数万円程度の軽いものになると思います」と、その薬についての説明をして、早速処方箋を発行した。そして対応していた看護師にさらに詳しく、制度の説明をってもらうことにした。

K医師の外来診察も、午後二時ごろようやく最後の患者になってきた。昼食のことがちらちら頭に浮かべていると、看護師から薬局からの連絡を告げられた。

「先生、今日から政府の援助制度は打ち切りになってしまったので、〇〇さんの薬は、全額自己負担額になるということです。それで〇〇さんは、薬代を払えないということで、泣き出してしまっているということです。」これを聞いて、K医師はしまったと思った。実は年度代わりの今日から、政府の援助制度が廃止になってしまったのを、すっかり忘れていたのだった。

この二年前ほどに「身を削る改良」というスローガンを掲げて連立与党にのし

上がった政党の党首がこの国の総理大臣になった。一年程前に医療費の削減のためとあって、閣議決定で援助制度を打ち切りにしたのだった。確かに国の財政を立て直すには、この制度はかなりの足枷になっていることは理解できる。しかしそれがまさに今日から始まったのだった。

「なんてこった」と思ったが、もうどうすることもできない。確かにその特効薬は、一瓶一か月分で価格が二百万円を越していた。これを根治のためには三か月続ける必要がある。しかもこの薬は保険制度の対象外になっている。たしかに政府の援助制度がなければ、一般のサラリーマンに払える額ではない。しかも根治をするためには他の選択肢は今のところ、ない。

さて、これから〇〇さんに事情を説明をしなければならなくなってしまった。「身を削る」というのは、こういうことだったんだ。午後もだいぶ遅くなって疲れたがたまり血糖値も低くなってしまった頭で、悲嘆にくれる〇〇さんに、どう説明をしたものかと、K医師は途方にくれてしまう・・・。△終わり▽

(注) 現在、実際にC型肝炎の根治可能な治療薬の薬価は、一日八万円ほどのものが存在している。通常十二週間服用するので、合計六七〇万円以上となる。これは政府の援助制度がなければ庶民がまかなえる額ではない。この援助制度の重

要性がみえてくる。なおこの薬剤の薬価が数分の一となつていく国も世界には存在している。このことは何を意味しているのだろうか？

オクラの山たより (81)

困了生

一

一茶は江戸の裏店で多くの苦勞を重ねて一人前の俳諧師としてやっていこうともがいていました。そのためにはまず江戸の生活に慣れねばなりません。しかし、それは難しいことであつたようであつた江戸住いであつた一八〇七(文化四)年四月六日に次のような句を詠んでいます。

①江戸じまぬきのふしたはし更衣

この句は金子兜太氏によれば「なんとなく江戸に馴染んでしまったなあ。だが、どうも江戸というところは、どうもしくりしねんだよ。どこか嫌だ嫌だと思つている。馴染み切れなくなつて北信濃の田舎ッペえで通していたときの方がよかつた。あの頃のことになつかしいよ」「一茶句集」からと解釈するのだそうです。何年いても馴染めなかつた江戸の生活を思い出して晩年の一八二四(文政七)年四月でも次の句を詠んでいます。

②そよそよと 江戸氣にそまぬ 柳かな

十五歳で江戸に出て五十一歳で初めて妻を迎えて故郷柏原に居を構えるまでおよそ三十年以上に及ぶ江戸暮らしでしたが、ついに江戸の暮らしに馴染めなかったのは一茶が北信濃の農民の出身であったからというわけだけではないでしょう。これは筆者の想像ですが、そんなことよりも今の東京と同じく江戸が田舎からの出身者の集まりであったためにかえって必要以上に田舎者をさげすむ「江戸っ子(もともとの出自をただせば大部分は地方出身者)」の狭い了見を嫌悪したためかもしれません。それゆえに一茶の視線はどうしても江戸で同じような苦い体験を味わった人々へと向きます。「彼らも好きこのんで江戸へ出て来たわけでもないのに何でこんな目にあうのか」。そんな一茶の思いが出ているのが次の一八一六(文化十三)年四月の句です。

③掃きだめの江戸へ江戸へと時鳥

「時鳥(ほととぎす)」と形容されているのはもちろん地方から奉公人などとなって江戸へ出稼ぎに来ている人たちのことです。とても人間の住むところとも思えない掃きだめのような江戸へとやって来る人々。そうしなければ生きていけない人々が地方の農村(在地社会)には多く

いたのです。「あいつは田舎者だ」とヒソヒソと背後でささやかれたときの嫌な気分、屈辱感は多くの人が味わったことでしょう。もちろん一茶も、です。たとえば次の句。句中の「棕鳥(むくどり)」は晩秋に信濃からやって来るたくさんの出稼ぎの人たちです。もちろん蔑称です。

④棕鳥(むくどり)といふ人騒ぐ夜寒哉

文化十二年

⑤棕鳥と人に呼ばるる寒さかな

文政五年

こんな仕打ちにあいながらも江戸時代の信州の農村などでは都市への出稼ぎが生活を維持していく上で不可欠なものとなっていました。それは生まれた農村の近くに現金収入を得る場がなく、江戸奉公で貨幣を得ることが最も確実に早道であったからです。信濃者は「信濃者」にっこりとして喰いかかり」と川柳で揶揄されたように、厳しい肉体労働によってですが、大食らいのイメージがあり、江戸では田舎者の代表者とされてきました。

余談ですが、江戸の人から見て田舎者イメージが強かったのは「相模女に信濃者」でした。ただし、「信濃者」は大食らいの男性肉体労働者というイメージが強いのですが相模国から江戸に奉公に来ていた「相模女」は「相模下女 助兵衛様の御意に入り」(「誹風柳多留」という川柳があるように労働そのものよりも卑

猥な性的対象として笑いのにされることが多かったようです。どうしたそうなたったかは、曾我兄弟の物語で兄弟と深く関わった相模の遊女二人の話から出たものだという説もありますが、本当のところはよく分かりません。

二

信濃者に限らず江戸は近国から長期の契約である年季奉公人と冬季の間だけの契約である冬季出稼ぎの労働力を活用することで武士の生活や都市の商業が成り立っていました。幸田成友氏の研究によれば一八四三(天保十四)年で江戸には年季奉公人が三万四千人いたとされています。また、冬季出稼ぎは徳川吉宗の時代にはすでに一万数千人はいたというのですが、その後、増加し続け、天保の頃には毎年五〜六万人が一時的に流入してきたと想像されます。江戸時代前半では生活の窮迫という理由だけではなく、商売や行儀の見習いをするという目的で江戸に出る年季奉公が多かったのですが、時代が進むにつれて下層農民を中心に生活のために出る冬季出稼ぎの方が多くなっていきました。また、寛政の改革で江戸に滞留する農民の帰農を強く促進しようとした法令に「年盛りのもの奉公稼ぎを嫌ひ」とあるように江戸での奉公への拒否反応も無視できません。以前、

取り上げたように裏長屋の狭い住居で「利潤薄き商ひ」で「その日暮らし」の

生活となってもその方が武家屋敷や商家に窮屈な思いをして奉公するよりもずっと気楽でいい、という意識が江戸へ出る農民たちに出だしたということです。

出稼ぎの農民が江戸の自由な風俗に迷って故郷の事を忘れその日その日を過ごすようになり、そのまま江戸に留まる者が増え、それが江戸にあつては一方では奉公人が減少して労働者不足を生み、もう一方では滞留した「その日暮らし」の人々によって天明の飢饉に際して江戸の打ちこわし騒動を引き起こされるなどの社会不安を生むこととなりました。もちろん、江戸に滞留する農民が増えれば農村では耕作地の荒廃をもたらしていったことは当然のことでした。幕府は幾度も「人返し令」を出しさまざまな方策を講じましたが、結局は滞留民のほとんどは故郷の農村に帰ることなく江戸に残り続けました。このあたりの状況を見る上でおもしろい資料があります。次の文書は一七九二(寛政四)年に帰農令が効果を上げない要因について勘定奉行が記したもので面白い内容です。

(江戸滞留者が小商い・日雇い稼ぎなどかなりの苦勞をしていたとはいえ機能を願ひ出る者がいたって少ないのは)在方(農村のこと)出生の者にてもいったん(農業を)中絶いたし候ふては(農業で)骨折り候ふ儀は相成りかね、または其の当人は帰農の志これあり

候ふても、江戸表にて妻子持つ者などは、其の妻子在方を嫌ひ候ふたぐいのこれあるべし

たとえ一家の主人に帰農の意志があつても「田舎の、あの暗く辛い百姓暮らしなんか、まっぴらごめんよ」と、江戸の都会暮らしになじんだ妻子から猛反対を受けて江戸を離れなくなっていることも帰農策失敗の一因とこの文書からは分かります。

もう一言つけ加えれば江戸に滞留した者の多くは生活に困窮して故郷の村から逃げ出した農民たちか、または正式の届け出のない出稼ぎ人たちだったので、江戸に滞留する間に村の宗門改帳（江戸時代の戸籍にあたる）にはすでに「無行衛（行方不明のこと）」とされ、「帳はずれ（宗門改帳から消され無宿人となる）」にされてしまっていましたから、帰りたくても帰れない状況になっていました。また、そもそも農業労働の厳しさが骨身に染みていたので、都市における多少の貧苦や生活苦などはどうということもなかったといえます。

三

なぜ出稼ぎ人が多く江戸に留まることになったかについて、ここで大急ぎで付け加えねばならないことがあります。農村の暮らしの辛さと比べ都市の暮らしの自由さを選ぶ妻子が多かったことを述べま

したが、江戸時代の後半になりますと農村の状況、特に土地の所有形態が変化してことによる江戸滞留の希望増加です。

農村では徐々に村の地主たちによる土地の集積が進んで、地主層が自らの手で耕作作業することが減少して全面的に小作人たちに土地を貸し付けて収穫の一定割合を得るといふ小作貸し付け経営へと変化していきます。貧しい農民たちは小作に従事して村の中に留まるようになっていきます。このため長期間の年季奉公は減少します。しかし、高率の小作料のために生活を維持することは困難です。そこで農閑期の冬季だけの江戸での出稼ぎが土地を失った没落農民、つまり小作人となった農民が増えていくにしたがつて、冬季出稼ぎが増えていくという結果となりました。

また、小作貸し付け経営へと変化していくと同時に、質流れしてしまったかつての自分の土地を買い戻すということが困難になった地主制が確立していきました。これによって江戸でお金を貯めていづかは土地を買い戻して本百姓になるという貧しい農民たちの期待感の薄れていきました。「故郷の村に帰っても、厳しい小作人の生活が待っているだけ」という思いがいちど村を出ると帰ることはなく江戸に定住してしまう出稼ぎ農民を多く出した要因だと近世史家はいいいます。

四

さて、十五歳で江戸に年季奉公に出てそのまま江戸に居続けた一茶は自身も「信濃者」とさげすまれたこともあったでしょう。望郷の思いを持ちながらも滞留者となつて俳諧師となるべく貧困に苦しんだ日々もあつたにちがひありません。そういったことからでしょうか、一茶は信濃に帰る人々、信濃から来る人々の姿を求めて中山道板橋宿に「出代り」の日（三月五日と定められていました）によく出かけていき、「出代り」の人々をよく句に詠んでいます。

⑥大連（おおうれ）や唄で出代る本通り

文政七年

「本通り」とは「中山道」のこと。「大連」とは多人数のことです。「下手の大連れ」という言葉があつて能力のない者がどれだけ大勢そろつていても、何の役にも立たないという意味ですから「三人寄れば文殊の知恵」とは逆の否定的な意味あいでは使つた言葉です。しかし、一茶も地方の出身者ですから、この句の「大連」は単に大勢連れだつてやってきて、また大勢で帰って行くという、その集団のことをいっているのでしょう。江戸の入る、江戸が出る、どちらにしてもワイワイとみんなで行けば歌の一つも出るでしょう。

出代りに「大連れ」、つまり集団であつても団体旅行のように信州の人たちがや

つてきたのは理由がありました。

出代り出稼ぎ人は行くも帰るも「人宿」というといった江戸の奉公人斡旋業者を頼るか、地元の藩などが設けた斡旋を世話したりトラブルの解決を世話したりする組織を頼るかして江戸に出ました。

たとえば長野県の諏訪地方では、この地を治める高島藩が出稼ぎ人の便宜を図るため、江戸に四軒の江戸宿を藩として設け、さらに諏訪にも諏訪郡中町の瀬戸屋治兵衛を世話人として、その下に村々の惣代を七名置いて出稼ぎ人の世話をさせることにしていました。この江戸の止宿と世話人との間で江戸での職場の周旋、止宿中の宿賃、奉公中に起きたトラブルなどの解決にあたることを申し合わせていました。多くの農民たちはこうした組織によって集められたため、大勢で江戸にやってきて帰る時も連れだつて帰ることになったのです。

そうした人たちが板橋宿で騒がしくしている風景を詠んだのが次の句です。

⑦江戸口やまめで出代る 小諸節

文政五年

「江戸口」とは江戸の出入り口のことです。東海道なら品川で中山道では板橋でした。「まめで」は「元気で」の意。「小諸節」は「小室節」ともいい小諸を中心とする東信濃に伝わる民謡です。東日本に多くある「追分節」の祖といわれている

ます。江戸の出入り口の一つ板橋で出代りの人が元気に「小諸出てみれば 浅間の山」と歌う声が聞こえてきたのでしよう。

板橋で見た出代りの人の中には子ども

もいました。次の三句は信州から江戸へやってきた子ども達の姿です。

⑧男なれば 出代るや 小さい子

文政六年

⑨五十里の 江戸を出代る 子どもかな

文政六年

⑩あんな子や 出代にやる 親も親

文政六年

なんでこんな小さな子どもまで遠い江戸奉公に出すのかと、十五歳で江戸へ出た自分のこととダブらせて非情な親や冷たい社会に憤りを一茶は感じ、けなげにも精一杯気を張って働きに行こうとしている男の子に同情しています。こうした子ども達は地主制が確立していく過程で自分の土地を失って小作人となった貧しい農民家族の一員で口減らしのために年季奉公に出されたのかもしれない。もちろん、出代りには老人もいます。次はそれを詠んだ句です。

⑪さてもさても六十顔の出代りよ

文化十二年

⑫出代りの市にさらすや五十顔

文政二年

⑬鳩なくや爺いつまで出代ると

文政五年

⑭出代りでなりし白髪や今年また

文政五年

老躯に鞭打って奉公に出なければならぬ「五十顔」や「六十顔」男たち。中には「爺（じい）」と故郷であれば呼ばれた人もいます。その疲れ切った彼らの表情は目に焼き付いてしまいます。江戸での厳しい労働を重ねるうちに白髪がまたぐんと増やした爺さんもいます。もちろん出稼ぎは苦勞ばかりではありません。

⑮出代りや江戸をも見ずにさらば笠

文政五年

という具合に毎日忙しい仕事の中でついに江戸見物もできなかった人もいますが、やはり故郷に帰るのは嬉しいようである。次のような句もあります。

⑯出代りのまめなばかりを手柄かな

文政五年

⑰出代りやまめなばかりを江戸みやげ

文政五年

「まめ」は元気なこと、健康なことです。江戸での稼ぎは今一つでも、まずは健康な身体で故郷に帰ることを喜んでいて姿が目に浮かびます。喜んでいる出代りの

中には故郷に帰るに際して

⑱出代りや帯ばつかりを江戸むすび

文政五年

という具合に、江戸で最新流行となつているファッションをすばやく取り入れて得意顔の娘もいました。悲しいことに稼ぎが多くなかったため、全身を江戸風にするまでにはいかなかったようです。

こうした出代りをくり返せば当然のことながら田舎者、椋鳥とバカにされる信州人でも江戸の風俗に慣れてきます。川柳にも「椋鳥も毎年来ると江戸雀」「誹風柳多留」とあるように田舎者も「椋鳥」といわれてもひるむことのない大胆な行動を取るようになります。

⑲江戸入りの一番声やほととぎす

文化九年

⑳時鳥花のお江戸も一呑みに

文化九年

㉑江戸入りやおめず臆せず時鳥

文化九年

㉒江戸ずれた大音声の時鳥

文化十三年

句の中にある「時鳥」は信濃者も含めた地方出身者のことです。江戸で生きていくとする彼らのたくましい姿だといえますが、やがては自分と同じように江戸に住むといつても最下層の人の住む裏店

で暮らしていくのかと思うと一茶は切ない思いがこみ上げてきたのかもしれない。自分も十五歳で江戸に奉公に出されてきたのだ。とても他人事に思えない。

そう思うと矢も立つてもいられず、毎年、出代りの日が来るとつい板橋にやってきてしまった。一茶が出代りの人々を見ると、思いはそんなものだったのではないかと、筆者は考えるのです。その思いが一茶の心の中にどれほど深く突き刺さっていたかは、①と②の句、および⑱から⑳の句以外はすべて北信濃に帰ってからの句であることから推し量ることができるといっても思えます。

隠された歴史(56)

満田 正賢

今回から続けて渡来人に関する話をします。古代史において渡来人がどのような役割を果たしたかというのは重要なテーマですが、具体的な話に入る前に、渡来人とは何かを明確にする必要があります。そこで、『渡来人とは何者だったか』武光誠(河出書房新社)、『渡来人と帰化人』田中史生(角川選書)、『謎の渡来人秦氏』水谷千秋(文藝春秋新書)、『新撰姓氏録の研究』佐伯有清(吉川弘文館)

などを参考にして、渡来人に関する問題の整理を試みました。

渡来人を分かりやすい言葉に言い換えると、「日本への移民」あるいは「日本への移住者」となります。しかし、渡来人をそのように定義してしまうと渡来人の考察はそこで終わってしまいます。なぜならば、日本人全体が渡来人になるからです。中国の史書の資治通鑑、魏略、晋書、梁書などは、倭人が自らの出自について「自謂太伯之後」と記しています。

これは、倭人⇨倭国を作った人々が、春秋戦国時代の中国南部にあった「呉国」の「太伯」の末裔であると称しているという意味です。

古代史研究における「渡来人」という用語は、戦前の「帰化人」の概念をそのまま引き継いだもので、日本に移住してヤマト王権の臣下となった氏族という意味です。日本書紀には「帰化」「来帰」「投下」「化来」という漢語として出てきます。具体的には、「日本書紀に記された氏族の中で、出自を倭国外にもつと記された氏族」、又は「新撰姓氏録（しんせんしやうじろく）」に『諸蕃』として区分された氏族」というかたちで把握されます。

渡来人という歴史用語の捉え方は研究者によって微妙に違いますが、一般的には「渡来人」とは、「飛鳥時代以前に朝鮮半島から日本へ移住してきた人びと」をさす用語で、奈良時代に中国の唐朝から日本に渡ってきた鑑真のような人物は

「渡来人」とは呼びません。

なお、田中史生氏は『帰化』もある段階で歴史的に成立した『渡来』につらなる一形態であった。移動者としての渡来人と移住者としての渡来系移住民は、概念上区別すべきある。又、渡来人、渡来文化、渡来系氏族の違いにも留意する必要がある。」と述べ、「渡来人を移動者と捉え直せば、終点となる『倭』『日本』からだけでなく、始点となる渡来人の出身地域や国際環境からも『渡来』の背景を多面的に捉えなければならぬ」と述べています。こういう視点を持つことは重要であると思います。

武光誠氏は「激動の朝鮮半島史が渡来人を生んだ。騎馬民族系の勢力(高句麗、百濟、新羅)に追われた朝鮮半島南端の韓族が日本に移住して、東漢氏、秦氏などの渡来人になった。渡来人は今の韓国人、朝鮮人とイコールではない。古代に日本に来た「韓族」は縄文時代の日本人と同じ原アジア人で、朝鮮族とは異なる文化をもつ人々であった。かつて江南などの中国の南部も原アジア人の居住地であった。」と述べています。そして「一方、朝鮮半島北・中部は箕子朝鮮、衛氏朝鮮、楽浪郡、公孫氏と四百年もの間中国の植民地であり、日本(倭国)も楽浪郡を通じて中国の先進文化を学んだ。大量の騎馬民族の南下が百濟と新羅の建国をもたらしたが、韓の文化を長く受け継いだのが加耶の小国群であった。」「朝鮮半島南

端の韓族が日本に移住した後、約二百年後に百濟と高句麗が滅亡したときに百濟王氏や高麗氏など朝鮮半島にいた騎馬民族系の渡来人が渡ってきた。」と述べています。

前述したように、倭人⇨倭国を作った人々が、春秋戦国時代の中国南部にあった「呉国」の「太伯」の末裔であると称しているという中国史書の記述は、原アジア人の居住地であった「呉国」の人々が、直接又は朝鮮半島南部を経て日本に渡ってきて「倭国」を作ったと考えれば、武光氏の説明とつじつまは合います。

しかし、同じ原アジア人の移住という捉え方だと、縄文人から弥生人への変化との整合が難しいのではないでしょうか。実際は、「太伯之後」という祖先に関する言い伝えは残っていたものの、朝鮮半島に居住する中で、楽浪郡にいる中国人(漢民族、及び北方騎馬民族系の人々との交流・混血を経て日本にたどり着いたのではないかと思われまます。

中国からの直接の渡来は別にして、主な渡来の始点として、激動の朝鮮半島史との関連で渡来人を捉えるという武光氏の視点は、田中氏の視点と共通したもので、重要な視点であると考えます。

新撰姓氏録では、加耶(任那)から来た氏族であっても「太伯之後」と出自を語れば、「任那」ではなく「漢(中国)」の分類になります。しかし、「倭国」を作った人々は「渡来系氏族」ではなく、新

撰姓氏録の分類では「皇別」「神別」と区分されます。「倭国」を作った人々が朝鮮半島の中で勢力を拡大した側面もありまます。そして「渡来系氏族」が後に朝鮮半島その他からの移民の大半を吸収するようになる以前には、「皇族」「神族」となった倭国人自らが朝鮮半島その他からの移民を吸収する時期があったと考えられます。もちろん、記録には残っていませんが、日本各地に朝鮮半島その他からの移住者が独自の集落を作っていた歴史があつたと考えられます。

それでは次に、渡来系氏族とはどのような民族でしょうか。

日本書紀に出てくる渡来系氏族の二大勢力は東漢(やまとのあや)氏と秦(はた)氏です。応神紀に「倭漢直(やまとのあたひ)」の祖阿知使主(あちのおみ)がその子都加使主(つかのおみ)とともにその仲間十七県を率いて来朝した、「同じく応神紀に「百濟から弓月(ゆづき)君という人物が百二十の県から多くの人々を連れて移住をしようとした」と記されています。日本書紀には弓月君が秦氏の祖先であるとはどこにも書かれていませんが、新撰姓氏録に「大秦公宿禰、秦の始皇帝の三世孫孝武王之後也。孝武王―功満王―融通王(一名弓月王)」と書いてある為、弓月君が秦氏の祖であるという事になっていきます。日本書紀の中で「私の先祖は多くの民衆を連れてきた」と唱えた氏族は、東漢氏と秦氏だけです。

この他にも五世紀に朝鮮半島から日本に移住した氏族がありました。応神紀に百濟から帰化したと記されている王仁（わに）を祖とする西文（かわちのふみ）氏は、河内国古市郡を本拠とする有力氏族です。東文（やまとのふみ）氏は東漢氏から枝分かれし、西文氏と並んで文筆をもってヤマト王権に仕えた氏族です。又、河内国飛鳥戸郡を本拠とする田辺氏は、馬飼の人々を率いた渡来系氏族でした。五世紀頃すでに朝鮮半島から騎馬文化をもった人々が来たと思われれます。

六世紀に入ると、今来漢人（いまきのあやひと）、又は今来才伎（いまきのでひと）と呼ばれる進んだ技術をもつ渡来人が登場しますが、かれらは男性数人か、もしくは一、二家族で使者の船や貿易商の船に乗って来航したのではないかと思われれます。閔晃氏は、「東漢氏が支配した人々は漢部と漢人に分れるが、漢部は東漢氏が与えられた領地に住む農民であり、それと区分された漢人は、六世紀後半頃以後に新たな技術を持って家族単位で渡来してきた人々ではないかと考えられる。」と考察しています。又、秦氏は日本の古代において最も多くの人口と広い分布を誇る氏族ですが、加藤謙吉氏は、「古代の戸籍や木簡などに書かれた秦人とは『秦氏の配下にあつて養蚕、機織り製品の貢納なども行なつた渡来系の農民』であり、秦人部とは『秦氏に貢納していた倭人系の各地の農民』であつた」と考察

しています。

四、五世紀当時の日本（倭国）は倭の五王時代です。私は「隠された歴史（13）」で、倭王武は通説的に語られている雄略天皇ではなく、倭の五王時代の倭国は北九州にあつたと考察しました。アメリカにおける新規移住者の居住地を考えると、朝鮮半島から移住してきた人々は、倭国の中心地ではなく、集団として新たに住み着ける場所を探したのではないかと考えます。それが吉備や大和、河内であり、その後次第に東国に移つていったのではないかと思います。つまり四、五世紀における近畿はフロンティア地域であつたと考えられます。

東漢氏も秦氏も、以前からその領地に住む農民、氏族集団の中に組み入れており、さらに六世紀以降の朝鮮半島からの移住者の大半を、今来漢人としてそれぞれの氏族集団の中に吸収したという見方は正しいと思います。それが、東漢氏、秦氏の勢力拡大の源泉になつたのではないのでしょうか。そして、シルクロードを通じて国際的な文化、多様な民族が流入した中国、朝鮮半島からの移住者の受け入れの度合いによつて、北九州に対する近畿の相対的な優位性が徐々に高まつていったのではないかと考えます。

新撰姓氏録について少し触れておきます。新撰姓氏録は弘仁五年（八一四）に奏進されました。各氏族は「皇別」「神別」「諸蕃」「未定雑姓」に分けられ、「左京」

「右京」「山城国」「大和国」「摂津国」「河内国」「和泉国」別に記載されました。各役所が把握している氏族の出自を記録したのですが、出自の怪しい氏族については、「未定雑姓」として区別しています。新撰姓氏録に記載された千百八十二氏のうち「諸蕃」としては二百二十四氏（27.4%）が記載されており、内訳は「漢（中国）」百六十二氏、「百濟」百四氏、「高麗」四十一氏、「新羅」八氏、「任那」三氏です。

「左京・諸蕃・漢」の筆頭は「太秦公宿禰」、「右京・諸蕃・漢」の筆頭は「坂上大宿禰」であり、それぞれ平安時代の秦氏、東漢氏の代表氏族です。秦忌寸など同一名の氏族も複数記載されています。又、「秦忌寸・太秦公宿禰同祖」など同祖の説明がある氏族も多数記載されています。

「漢（中国）」の出自を持つ氏族の大半は朝鮮半島から移住した氏族と思われませんが、自ら出自を中国としているものは、「漢」と区分されています。「加耶（任那）」から来たと思われる秦氏、東漢氏一族も中国に出自があると唱える百濟人氏族もすべて「漢」に区分けされています。その中には「揚侯忌寸・出自隋煬帝帝之後、達率（だつそつ）百濟の官位」阿子王」など中国に出自を持つ百濟官僚が日本に移住してきた過去が見える例もあります。又「百濟」「高麗」に区分された氏族の大半は百濟、高句麗の滅亡以降に移住して

きた氏族であると思われれます。「百濟王（くだらのこにきし）」「百濟朝臣」「高麗朝臣」などという日本で与えられた姓が記載されているのは、百濟・高句麗からの逃亡者をヤマト王権が臣下に取り込んだことを象徴していると思われれます。一方で、「新羅」「任那」に区分された氏族は、「橘守・三宅連同祖、天日鉾（あめのひぼこ）命之後」「大市首・出自任那人都怒賀阿羅斯止（つぬがあらしと）」など、日本書紀の記述によつて出自が区分されたものと思われれます。

新撰姓氏録は、「未定雑姓」という区分はあるものの、基本的には自己申告制で出自が記されていると思われるので、それを各氏族の歴史として信用するのは危険です。但し、日本書紀に出自が記されていない氏族の出自を探るのには一定の有用性をもつと思われれます。例えば、「左京・諸蕃・漢」に記された「伊吉連・出自長安人劉家劉雍」などは、齊明紀に引用された伊吉連博徳（いきのむらじはかとこ）書の著者である伊吉連博徳が遣唐使において直近の中国文化と中国語がわかる、直近の中国からの移住者として重宝されたという史実が垣間見えるのではないのでしょうか。

なお、新撰姓氏録は、「倭国」が成立した以後の朝鮮半島その他からの移住者が、いかに日本社会に広がつていったかという考察を行なう上で、貴重な資料であることは間違いがないと考えます。

今回は、渡来人に関する個別の考察を行ないます。

支離滅裂 近未来予想 (2)

short & short y.s.

① 矛盾こそ成長のカギ

世の中にあふれている言葉は、嘘ばかり。いや、嘘の反対の意味を考えればいいだけだ。戦争を正当化する為に平和を叫ぶ。国の借金を返すには労働の効率を上げないと声高に言うて過酷な労働を強いる。バカバカしい、能天気な事を信じている人が多すぎる。

② 労働再生産とは子育ての事である

子どもを産まなくなり国も騒ぎ出したが、子供を産みたくなひのは当たり前だ。手間がかかるし金もかかる。大きくしても企業に盗られる。親になつても何も良い事がない。お国の為に産めよ増やせよ、と戦時中は囁し立てられて戦争に盗られた。今は、企業に盗られる。

③ プーチンはヒトラーを超えられるか

プーチンも相当いかれているが、ヒトラーを超える残酷性を持つている

だろうか。否、持つてはいない。も持つていたら、すでに核兵器を使つてると私は思う。いろいろと理由は言うが、核兵器を使う度胸は今の世界の指導者にはない。少なくとも広島・長崎の悲劇を何らかの形で知つておれば、使えない。

④ 核の抑止力は幻だ

核兵器は核兵器で抑止するなんて誰が言い出したのか。自分たちの核を正当化するためのウソに過ぎない。その為に、巨大な防衛費を永続的に使い続ける者たちの詐欺行為を続けるためのもつともらしいウソである。広島・長崎の原爆の恐ろしさを世界の人々に伝え続ける事が核の抑止力になる

「道をゆく」四〇 日光

成瀬和之

「女芭蕉の心意気

桑原久子の旅日記から」(八)

峠越えを繰り返し、桑原久子さん達は日光にやつと着きます。やつれた久子さんは詠みます。

たびにしてやつれしおのが黒髪
の山の名ににることもはずかし

久子

(旅でやつれた私の黒髪がこの黒髪山の名に似ていることも恥ずかしい限りです。)

日本では、高い山は古来から神でもありました。男体山、女峰山(によほうざん)、太郎山の日光三山自体が御神体でした。日光を一大聖地に変えたのは勝道(しょうどう)上人と社伝にあります。

はじめ勝道上人は男体山の山頂を極めようと、大谷川の北岸に七六六年紫雲立

寺(現在の四本龍寺の前身)を建てます。翌年の七六七年男体山(二荒山)の神を

祀る祠を建てたのが二荒山神社の創建です。これが本宮です。ついに七八二年、

勝道上人は二荒山初登頂の大願を果たし、山頂に小さな祠を祀ります。これが奥宮

です。七八四年、男体山中腹の中禅寺湖北岸に日光山権現(中宮祠とその神宮寺

の中禅寺)を建立しました。本宮は、年度重なる大谷川の氾濫で社地が危険な状態になったため、七九〇年に山裾の東照

宮陽明門付近に社殿を移しました。二荒山神社は、本宮、中宮祠、奥宮の三か所からなるのです。

中禅寺が建立された当初は男体山の登山口にありましたが、一九〇二年の大山津波をきっかけに、中禅寺湖歌ヶ浜に移転されました。立木観音などユニークな

仏像が祀られています。中禅寺の本堂裏の崖を背に建っているのが五大堂です。勝道上人開山一二〇〇

年記念事業として建てられたもので、一九六九年に完成しました。五大堂は、高い場所に建てられているので、中禅寺湖や男体山を一望でき、その眺めは圧巻です。

なお社伝などでは勝道上人が開祖と説明されていますが、実際には古代の祭祀の痕跡を示す遺跡も見つかっており、相当古くから聖地として男体山、女峰山、太郎山の日光三山が信仰の対象であったことがわかっています。

二荒山神社は古くは日光三社権現と言いました。権現信仰は、仏様が権(かり)に姿を現(あらわ)した権現を信仰するという神仏習合の考え方です。

勝道上人が日光を開いて以来、日光はずっと神仏習合の時代が続きました。神仏習合の思想から、一二世紀ごろ二荒山神に現在の人格神があてられ、男体山は祭神が大己貴命(おおむちのみこと)で本地仏が千手観音、女峰山は祭神が田心姫命(たごりひめのみこと)で本地仏が阿弥陀如来、太郎山は祭神がアジスキタカネノカミで本地仏が馬頭(ばとう)観音となりました。

このように、山岳信仰と神道、仏教の考え方が違和感なく同居していたのです。

熊野三山も本来、個別の自然崇拜に端を発する神を祀る別個の神社でした。しかし平安時代半ばには同じ神を祀りあうようになり熊野三山として一体化しました。神仏習合の本地垂迹説により、本宮の主神・家都美御子(けつみみこ)大神は阿

弥陀如来、速玉大社の神は薬師如来、那智大社の神は千手観音を本地仏としました。この三神を三所権現とするのと同じです。

東国の人々にとつては、紀州熊野まで行かなくても二荒山こそ浄土だったのです。

しかし、江戸時代になって東照宮が造営されたので、古来からの山岳信仰はすっかり徳川家一色に塗り潰されてしまいました。

一六〇三年、家光の相談役・天海（てんかい）が貫主（かんす）となつてから、戦国時代の混乱で一時苦境に陥つた日光が再興されます。一六五五年には四本龍寺に始まる満願寺というお寺は、由緒ある輪王寺という称号を賜ります。

こうした神仏習合のあり方は、一八六八年（明治元年）の神仏分離令を境に改められ、日光もその例外ではありませんでした。一八七一年に神仏分離が行われ、一時は数多くの寺が廃れました。輪王寺も窮地に立たされ、一八六九年には輪王寺の称号も廃止されました。これらの非運を乗り越え、一八八二年に一山一五か院が復興、翌年には輪王寺の称号も復活しました。

「日光を見ずに結構というな」とい言われます。日光東照宮、日の暮れるまで見ても飽きないというところから「ひぐらし門」とも呼ばれる陽明門など確かに一見の価値はあるでしょう。けれども、

かねて日光参詣をめざしていた桑原久子さんは、「東照権現の御宮居のうるはしきこと詞に述べんもかしこければ是をいはず」とふれるのみです。

それよりも、その左側にある二荒山の社にこだわっています。

「はじめより坐ませる地主の御神なればとて、日光の山を開き給ふ時、千石の御神領を付給ふよしなり。御社のうるはしきこと、家光朝臣の御社につげり。

この御神は東の国々に古より御す多もいと広くましますよしなり。さればその心にしめて子孫のみのこの末の栄をも守り玉ふなるべし。」

このように日光三社権現（現在の二荒山神社）に注目し、次の歌を詠んでいます。

日の本に二つなしとふ二荒山
しずまる神のひろきめぐみは
久子

（日本に二つとないという二荒山だが二荒もしずまる神の恵みの広きことよ。）

久子さんは、つつがなく参詣し得たことに感謝し、「二荒詣での願いはこと足りぬ」と満足そうです。

久子さん宅子さんも、東照宮の豪華には驚いたものの、その向こうに「古よりの神」の存在を感じているようです。久子さんらは松尾芭蕉の流れを汲んで

いるのでしょうか。

松尾芭蕉も『おくのほそ道』の日光のところで、東照宮には慎重な筆運びをしながら、最後に「あらたふと青葉若葉の日光」の句を据えています。この句は人工美の及びもつかぬ天然自然美を詠つたものでしょう。

久子さんら東照宮、二荒山神社に詣でた後、華嚴の滝など滝巡りもしています。しかし滝より上にある、中禅寺湖畔の中禅寺は女人禁制のため行けません。麓に観音堂があり、ここを女人堂といつてここまでは女性の参詣も許されました。久子さんらは供の男どもばかりを参詣させ、女人堂で休憩しています。

中禅寺湖は水面の海拔高度一二六九メートル、周囲二五キロメートル、最大水深一六三メートルで、日光を代表する湖です。約二万年もの昔、男体山の噴火による溶岩で溪谷がせき止められ、原形ができました。

今はボートで中禅寺湖遊覧ができます。私が行った時は営業時間の午後三時を過ぎていて、残念ながらボートに乗れませんでした。

一八七二年（明治五年）まで女人牛馬禁制でした。明治に入るまで女性がいなかったため、中禅寺で出産が初めて記録されているのは、実に一八八四年です。女人禁制の地であったゆえの次のような悲劇的伝説もあります。

巫女が「神に仕える身であれば、

山に登っても許される」と思い、中禅寺に登りました。しかし湖畔に出ると、身がすくみそのまま石になつてしまった。

その石が「巫女石」と呼ばれ、中禅寺湖畔の中宮祠の鳥居横に今も残っています。

一八七二年、女人禁制が解かれると、さっそく女性が中禅寺湖畔に入り、男体山にも登っています。私が中禅寺湖畔を訪れた二〇二二年五月には男体山の登山を終えて帰ってくる女性を見かけ、時代の変化を感じました。

◇ 以下は、15ページの「ふみの道草(60)」の続きです。

この句は、戦後七十八年目の「戦せぬ国」で今、ロシアによるウクライナ侵攻を目の当たりにして防衛費倍増が現実味を帯び、「もはや戦後ではない」が「新しい戦前かもしれない」不安と結び付くことになっていることに警告を發しています。「二億年銀杏は銀杏戦せぬ国のかたちは百年も経ず」なのに、です。

何のことはない。「読むのは上手いボク」

と称して、十七音の人の句を借りて、詠んでもいないことを深読みし、あるいは句に託（かこ）つけて自分の思いを何百字も語っているだけかもしれないね。でも面白い、もう少し続けてみたいと思うことしきりです。

俳句

影山 武司

七重八重青嶺の迫る鳳来寺
闇に問ふ答へのありや青葉木菟
緑さす野外授業のにぎやかに
山城へ攻め上りゆく青嵐
天道虫指の先まできて空へ
夏草の刈られて息を残しをり
ソーダ水かざして空を切り取りぬ
スケボーの板を跳ね上げ南吹く
沖の島見え隠れして薔薇の庭
古民家も空き家も映る植田かな

編集後記

SK生

▼先号から「ショートショート」のコーナーを始めた。内容は近い未来にやってくることを予想される危機的な世界である。我々が間近に迎えるだろう世界を「書いてやろう」と名乗りをあげた方に書いていただいた。今、進みある状況にほんの少し先まで延長線を引けばどうなっていくか、楽しんでいただけたら幸いである。
▼最近メディアで報じられたロシアで語られて

いるジョークを一つ。「プーチン大統領が『核戦争が起これば、われわれは殉教者として天国に行く』と述べた。これを聞いた天国の神はあわててNATO加盟を申請した」。ロシア人は無類のジョーク好き。反政府運動が激しく弾圧される中、彼らの心の中に権力者を笑い飛ばす精神が生き続けていることにホッとす。



ダリアの花

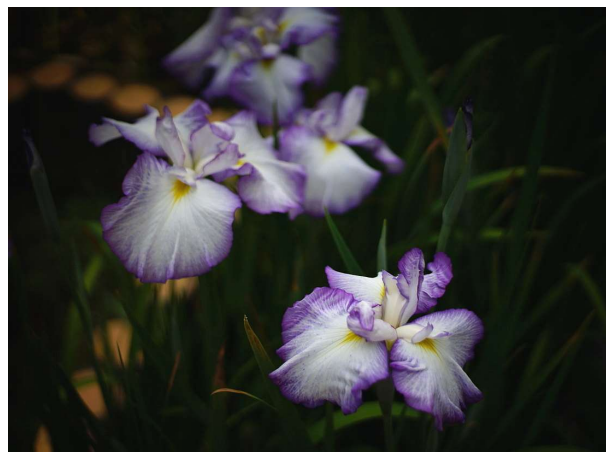
京都府立植物園にて



紫陽花



ヤマボウシ



花菖蒲



アリウム・ギガンテウム

川柳を読む

句会などで「あなたのこの句はどんな意味？」などと言われることがある。また、川柳大会に十数句を投句しても一句も入選しないことも多々ある。選に外れ採句されないことを川柳界では「没(ボツ)」と言う。入選ゼロなら全没。あまり響きのいい言葉ではない。そんなことを私は基本的には気にしない。「僕の句の良さは誰にも分からない」と思うことにしている(言うまでもないが投句は無記名である)。「基本的」と言うのは、そりゃ入選すれば入選したで、選者という他者に理解してもらえたかとうれしいからである。

しかし、大会や句会が面白いのは、自分の句が入選するかどうかなどではない。入選した句に出会って、人間の発想の、私にとっては意外なほどの広さと深さと柔軟さを、つまりは人間の精神の豊かさを思い知ることが出来るからである。そして、私はいつもこう思うことにしている。

詠むのは下手

だけど詠むのは上手いボク

さて、読むのが上手いかどうか、柳誌から句を拾い出して評してみたいと思う。取り上げる句が「いい句」かどうかを選ぶ基準にしていない。失礼を承知で、私が「何か言いたくなる句」が選んだ基準である。

海よりも広くて深い母の愛

春美

母の愛に敵うものではありません。句を読みながら、海よりも広くて深い母の愛は、人間のどんな精神から生れるのだろうかと思いました。そして、まことに突然ですが、『パンセ』で語られたパスカルの言葉を思い出しました。

「すると二種類の精神が存在することになる。一は精神の力と正しさであり、他は精神の広さである。ところで、一方は他方なしによく存在しうる。精神は、強く狭いこともありうるし、広くて弱いこともありうるからである」

このパスカルの言葉は一对の川柳になります。

精神は強く狭いことがある
精神は広くて弱いこともある

「考える輩の精神揺れている」という訳です。それでも、人間は誰でも、時に及べば「広くて強い精神」を発揮することもある、と私は信じます。

なぜ人を人間言うか考える

正章

おもしろいものの方です。「人間」とは、早速辞書を繰ると、「(われわれがそれであるところの)人。社会生活をするものとしての人。人から、人物。世間、世の中。人の社会」などとあります。

私も「人類」とは何? どこにいるの? と思ったことがあります。「人間をほかの動物と区別して言うときの話の全体を一括して言う。個人を指さない」という人類。「私の中に人類を見なければ人類はどこにも永遠にいない」のですね。

人生の節目節目に桜花

幸子

日本は、入学や卒業、就職や退職、転勤や結婚、出会いと別れなど、人生の節目ともなる春に木に花が咲く国です。桜が咲けば愛で、散れば惜しみながら、桜に託して遠い出来事が一つひとつ思い出されます。同時に、桜を見ながら、これからどんな節目があり、何と出会ってまた桜を見るのだろうかと思ふこともあります。私たちは「桜散りまた来年と言う平和」の中に生きています。詩人の茨木のり子さんが、「さ

くら」という詩の中にこんなことをうたっていました。

『ことしも生きて／さくらを見て
います／ひとは生涯に／何回ぐらいたくらをみるのかしら／ものごころつく
のが十歳ぐらいなら／どんなに多くても七十回ぐらい／三十回 四十回
ひともざら／なんと少なさだろう／もつともつと多く見るような気がする
のは／祖先の視覚も／まぎれこみ重なり
あい霞だつせいでしよう／…』

桜への思いは、この国に生まれた私たちに共通のものです。

防衛費国のかたちを思いやる

勲

もしかすると今、誰もが漠然と感じている不安を詠んだ句に出会いました。「もはや戦後ではない」と経済白書が書いたのは、昭和三十一年のことでした。戦後復興から高度経済成長へ向かうことを高らかに宣言した言葉でした。

◇ 以下の文章は13ページにあります。